

20世紀社会学と社会調査の発生史 - 社会的世界論をもちいた初期シカゴ学派社会学研究要約と図解 -

著者	鎌田 大資
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 社会科学篇
号	50
ページ	79-96
発行年	2019-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00002671/

20世紀社会学と社会調査の発生史

——社会的世界論をもちいた初期シカゴ学派社会学研究要約と図解——

鎌 田 大 資*

Genealogy of the 20th Century Sociology and Social Research
—Some Summaries and Charts Inspired by Social Worlds Perspective—

Daisuke KAMADA

本稿は、アンセルム・ストラウスの社会的世界論（social worlds perspective, Strauss 1978, 1982, 1984）について、アーネスト・バージェスの博士論文との関連で論じた前稿（鎌田 2018, 2018a）の延長線上に、着想した社会学史への応用研究の一例である。考察に盛りこまれる内容は、おおむね2014年以降に論者が展開してきた学説史研究の諸論点であり、本稿は今後も継続される研究の中間報告と予告編の性格を帯びる。ただし20世紀社会学発展の中心を、初期シカゴ学派社会学で開発され全世界に普及した社会調査の営みと論者は指定している。

社会学史の考察のまえに、社会的世界論の学史への適用の着想経緯と、社会的世界論の発想の原点のひとつと考えられるハワード・ベッカーの、『芸術世界論（Art Worlds）』¹⁾（Becker [1982] 2008=2016）に関するコメントから、芸術世界論、社会的世界論自体がシンボリック・インタラクショニズム（symbolic interactionism, 以下、SI と略記）の社会的パースペクティブとして、発生した学説史的経緯をも振りかえる。

議論の中核となる社会学説史のフロー・チャートについて学会などで触れた際には、プレゼンテーションの時間的制約から数分ずつの説明しかできなかった事情もあり、常識的論点の凡庸な再確認として鋭敏な参加者からは笑殺された。とはいえ、自分なりに初期シカゴ学派を通して20世紀の社会学、特に社会調査の制度化の錯綜した歴史的展開に見通しをつける意義はあるかと考え、未熟な段階のまま公開する。

1. バージェスからの発見——蛇行する解釈過程

本節は、バージェスの博士論文『社会進化における社会化の機能』²⁾（Burgess 1916, 以下、バージェス「社会化論」と略記）から専門職論にかかわる論点を抽出し、またバージェス、ストラウス、ベッカーらの学問業績全体を鳥瞰したうえで、それを社会的世界論と結

* 人間関係学部 人間関係学科

びつけ、彼らが社会学を通じて成しとげた知的社会運動を整理する³⁾。

論者は、この数年、バージェス「社会化論」の解説に取りくんでいる。ただし、バージェスの文章は平易な英文で、目を疑う奇矯な論理構成もなく、一見、解説の必要もないかのようなのである。ところがバージェスの研究の背景となった諸状況は忘れられている。もし仮に、彼の著作の前後で変更された社会学研究の動向などが解明されれば、初期シカゴ学派社会学の、現在では理解しにくくなった部分も明らかになるだろう。

社会化 (socialization) という言葉の意味は、ロシア革命直前の1916年当時、社会主義系の資本や土地の没収、共有化、国有化などが主流であった。現在、もちいられる人類学の「文化とパーソナリティ」学派に発祥する文化的、社会的価値観を児童や青年が習得し内面化する過程という意味は、まだ一般化していない。しかしその過程自体は、チャールズ・クーリーやジョージ・ミードにより理論化され語られはじめていた。さらに社会化にはゲオルク・ジンメル起源の集団作り、仲間作りという意味があるが、バージェスは社会主義系の語義にジンメルの語義をかませて「社会化」概念に一定の幅を持たせ、かなり多様な意味を盛りこめるマジック・ワードのようにもちいている。

ただし「社会化論」冒頭では、「社会化」の定義は「集合での活動への個人の心の分節化」(2)という曖昧模糊とした表現で与えられている。そして当時、主流だった社会主義系の「私有財産の廃止、国による没収」などの意味と距離を置き、1930年代以降に文化人類学の「文化とパーソナリティ学派」で一般化する「社会で共有された価値観を成長期、思春期の児童が内面化し、自分のものとして行動できるようになること」という児童発達に関する意味に向かって変化させていくかのように、そこではバージェスが意図的にゆとりをもたせておいたのではないと思われる⁴⁾。

バージェス「社会化論」1, 2部のイギリスにおける発明史、政治社会史の記述は、まさにハーバート・スペンサーが唱える社会進化の過程そのものと考えられる⁵⁾。すなわち、未開社会から文明社会までを単一の発展段階に当てはめて分類する社会進化論の思考法が、体系化された本丸であるイギリス社会自体における社会進化の過程を探り、さらにその過程を「社会化」の機能を通じて一般化する野心的な試みと、バージェス「社会化論」は解しうる。

そして、その3部12章の精読により、はじめて彼が述べる「社会化」という言葉の真意がわかる。バージェス自身が特に強調しようとしている「社会化」概念の定義としては、本文の記述に若干の編集を施して、「検証され蓄積された知識の活用を通じて進展する社会進化や進歩への貢献」(184; 鎌田 2018: 148)という表現を抽出する。この表現に関連するあたりに引用されたハーバート・クーリーの、企業家や政治家など経済、法、行政の専門家 (experts) と一般民衆の乖離、民衆側の専門家への反感に関する指摘を参照することで、バージェスが「社会化」定義で意識しているのが、当時まだその呼び方が存在しない専門職 (profession) に関する社会現象だと察しうる⁶⁾。この部分では、バージェスの生涯の学問的軌跡を考慮し、専門職支援の社会運動を組織し展開する志を論者は読みとりたい。

パークとバージェスの『科学としての社会学入門』のアメリカ化 (Americanization. Park & Burgess [1921] 1924: 762-769) が、各国からアメリカにきた移民が積極的にアメリカという新しい国作りに参加し貢献するという意味でもちいられるのと同様に、バージェ

ス「社会化論」では、科学的に検証されうる知識を蓄積して、それを使いこなす専門職を立ちあげ、そうした専門職メンバーを支援、養成することで、アメリカという社会作りに貢献することを提唱していると解釈できる。

バージェス自身がのちに仮釈放の成否に関する予測尺度、結婚や婚約の成否に関する予測尺度の作成と検証に精力を傾け、それぞれをもちいて刑務所に勤務する社会学的アクチュアリー (sociological actuary) や、結婚状況について診断助言する結婚カウンセラー (marriage counselor) の養成に熱中、努力していく経緯を彼の活動の具体例と考えると、その専門職の立ちあげと確立という社会的実践へと向かう志が、「社会化論」ですでに表明されていると考えられる。

また前稿 (鎌田 1918a) では触れていないが、同心円図式を通じて社会解体論を現実の諸都市に当てはめて、非行、貧困福祉対策に活かしていくというシカゴ・エリア・プロジェクト (Chicago Area Project) も、クリフォード・ショーやマッケイというシカゴで学んだ卒業生と協力した福祉事業、専門職養成事業であろう。たとえば、主にアングロサクソン系プロテスタントの、高学歴女性ソーシャル・ワーカーが主体となるハルーフハウスのような従来のセトルメントに代えて、カトリックの男性を含め、非行少年の地元コミュニティ出身で、多くは自身も非行経歴のある更正者を、現地ソーシャル・ワーカーとして養成し、先輩が親身に面倒を見るような形で後輩の就職先を探し、社会的立ちなおりを見守るといった構想である。

次に、バージェス「社会化論」第2部で展開されているイギリス史の叙述から読みとれる彼の特異な歴史観を復元する。バージェスは祖父の代にイギリスからカナダへ、親の代に5大湖を超えてアメリカへと移民した家系の一員で、父はイギリス国教会、日本でいう聖公会系の牧師であり、詳細は不明ながらバージェス「社会化論」でも、家伝の諸情報を活かした議論が展開されていると思われる。そこではメソディズムという国教会内部会派についての教派史的な知識と、彼の歴史観やソーシャル・ワークに関する考え方を規定しているフェビアニズムへの理解が組み合わさり、独特な考え方が展開されている。

バージェス「社会化論」第2部におけるイギリスの政治社会史では、各時代の社会化状況の最終的な到達点として、労働組合運動が展開して福祉国家政策と呼ばれるものが、ウェッブ夫妻のようなフェビアンたちを触媒として形成されていく時代に焦点が絞られる。すなわち、社会化の歴史の到達点は、労働運動の展開により土地や資産の社会的共有化に向けた施策が検討されていくところに、設定されている。

バージェスは、労働組合運動が発生する初期の指導者にメソディストの巡回説教師が何人か含まれているということを強調している。ところが労働組合運動とメソディストやバプティストなどキリスト教宗派関係者との関係を強調する論調は、時代に先駆けたものである⁷⁾。

イギリス国教会の弛緩し墮落した宗教性を刷新する国教会の内部会派、メソディズムの、さらに周辺部分に属し、北部の炭鉱町などで活動したプリミティブ・メソディストと呼ばれる会派の、聖餐式や洗礼式を施す司祭の資格を持たない一般信者出身の巡回説教師から、初期の労働組合運動や生活相互扶助運動を指導する数人の人物が現れる⁸⁾。それを含めて諸種の職業分野ごとに組織された労働組合運動が開始されるが、初期の労働運動はメソディストの教派組織を見習った点が多く、一時は労働組合と教会活動が融合した労働

教会のような形式が普及していたことも指摘される (Bevir 2011)。

さてバージェスの博士論文で引用された参考文献リストを作成し、内容まで検討してみると、彼の英国史研究の理論的支柱の最大のものは、フェビアニズムの中心人物であるウェッブ夫妻の著作だと考えられる。ウェッブ夫妻は組合運動全般の広範な調査から福祉国家政策の骨子となるナショナル・ミニマムや一日8時間労働制、児童労働の禁止、労災保険、失業保険、年金制度の整備などの交渉項目を、全国民の福祉に必要な政策項目として抽出した。

こうして、1. 英国国教会を宗教的に刷新するメソディストの運動、2. メソディストの分派、プリミティブ・メソディストの巡回説教者から労働組合運動の初期指導者の何人かが輩出し、メソディストの組織原理を流用して組合組織が形成されるという地域労働現場の福利厚生や相互扶助の活動、3. フェビアンたちの政治綱領形成において、労働組合に蓄積された活動記録や綱領などの文書の調査から、現在の労働法制につながる提言が抽出されるという3つの社会的領域⁹⁾が、ゆるやかに接続して歴史が形づくられていくという考え方が読みとれる。そこから「予期せざる結果」の連続のうちに、宗教性の刷新運動から労働組合運動が生じ、さらに福祉国家政策の骨子が抽出されるという歴史的連鎖のフロー・チャートを作成できる¹⁰⁾。

この3領域の接続は、労働組合運動の初期の指導者となった数人のプリミティブ・メソディストの巡回説教者たち、また各地、各業種で蓄積された組合運動の綱領や実践を比較検討総合して綱領化し、イギリス労働党の政策形成に影響を及ぼしたウェッブ夫妻というわずかな数人ずつのつながりによって接続されるものだが、そもそも歴史的社会的現象の多くは、そうした数人のキー・パーソンやその周囲の人々のあいだの活動に観察される「交渉 (negotiation)」によって、大きくかたちを変じうるものではないか¹¹⁾ (Strauss 1978a)。

さて「社会化」という言葉に関し、実際にイギリスで原子力や電力、ガスなどの基幹産業の国有化が推進されるのは、第二次世界大戦後の労働党政権以降だが、その頃には「社会化」の社会主義的語義は古びてしまい、「国有化 (nationalization)」という言葉が新たに当てられる。さらに1980年代以降の保守党政権では財政赤字の補填という観点から、国有企業の民営化 (privatization) が盛んにおこなわれ、社会化・国有化政策も時代のなかで一回転して元に戻るような動きを見せる。

2. 芸術世界論、社会的世界論の社会学史への応用可能性

バージェス研究にストラウスの社会的世界論、ベッカーの芸術世界論を応用的に導入する流れは、論者の研究史においても、やはり研究知見が蓄積されるうちに世界観が一回転して振りだしに戻るような動きになっている。というのも大学院進学当初の論者の研究活動の出発点が、ベッカーの著作『芸術世界論』(Becker [1982] 2008=2016)を、社会的世界論の系統へ位置づける再検討作業だったからである (鎌田 1989)。『芸術世界論』の視点から、レイベリング理論の立場による代表的逸脱研究として広く知られる『アウトサイダーズ』(Becker [1963] 1973=[1978] 2011)を見かえすと、ジャズ・ミュージシャンの社会心理学的研究として、逸脱研究というより芸術社会学の一角に位置づけられるように思われた¹²⁾。

芸術というと普通に思いだす視覚芸術、音楽などについて以外にも多様な社会的活動を、芸術世界論の約定（conventions, 邦訳では規則）や美学などの概念をもちいつつ論じることができる。その好例は、連続エスノグラフィ制作魔（serial ethnographer）と紹介されることもあるゲアリー・ファインのエスノグラフィであり、その全作がベッカーの芸術世界論をモデルにまとめられている（Sassatelli 2010）。ロール・プレイング・テーブル・ゲーム、少年野球、料理店、高校弁論部、キノコ狩り、日曜画家、気象予報官、競技チェス（Fine 1983, 1987=2009, [1996] 2009=2000, 2001, 2003, 2004, 2007, 2015）などを対象に、前人未到の多数の社会的世界のエスノグラフィ連作で、参加者の行動の「美学」が抽出され論じられる。そこでは規範やモラルという硬い捉え方では抜けおちてしまうレジャー、娯楽、趣味、スポーツ活動の多彩なこだわりどころが巧みに掬いあげられている。このように芸術世界論も SI の枠組みらしく、多様な世界の記述に対する汎用性の高さが特徴である。

一方、社会的世界論は、ストラウスの1870年代末から80年代初頭の3つの論文で基本イメージが与えられ、交渉される秩序（negotiated order）、交渉（negotiation）パースペクティブとあわせ、SIの枠内で歴史的社會変動を捉えることを可能にする理論装置である¹³⁾（Strauss 1978, 1978a, 1982, 1984; Strauss et al. [1964] 1981）。それは、グレイザーとストラウスの終末期医療に関する先行研究（Glaser & Strauss 1965=1988）に従い、エイズ研究（Epstein 1996）、ガン研究（Fujimura 1996）、生殖医療（Clarke 1998）など、主として科学、医療研究で展開されてきた。

「芸術世界」も「社会的世界」も、組織のイデオロギーや行動様式、メンバーのリクルートのあり方など多様なきっかけから分派し、新たな下位世界（subworlds）に分化し、またそれらが交差、合同、合流しあって社会的景観を形成し、時には社会のまったく異なる水準に属するものとしか思われない世界同士が接続、派生しあう。

ストラウス自身、最晩年の著作（Strauss 1993: 235-237）ではエイズ研究の進展の諸相を論じ、当初からあった社会的世界やその下位世界のほかに、アリーナ（arenas）¹⁴⁾という概念を提示した。すなわち、エイズ研究において、それをヨーロッパ系の男性がかかる病気として、家父長制の男性支配構造を覆す神の賜物のように捉えるフェミニスト集団の社会運動が、エイズ研究への公的予算配分に影響を及ぼすといった現象が、エイズに関する疫学的研究と、家父長制支配と戦うフェミニズムという異なるアリーナ同士の接続の事例として挙げられる。

時間経過のなかで、その組織の変遷、動向を分析し、水準の異なる領域同士の関係を捉えれば、科学も医学も社会の一部として世界外部から時代風俗や思想などの面で影響も受け、世界内部での新たな発見や技法の開発などにより否応なく生じる研究実践の変遷のために、多様な学派が分派し、時に異質な社会集団とも接合するといった現象が観察できる。

ここで、特に社会的世界論のヒントになったと思われるベッカーの『芸術世界論』の発想源を確認する。芸術世界論の連作論文が作成、公刊されつつあった時期のインタビューで彼は、以下のように語っている。

芸術と科学は両方とも、自在にどこにでも走っていけるようなやり方（a free-

wheeling way [自由走行方式? 引用者]) で組織されているようにわたしには思える。それらは最大限の多様性を、あるいは少なくとも、教育のような高度に集中化されたものよりもずっと多くの多様性を許容するように組織されているのである。[中略] 芸術を、研究すべき興味深い領域であると私が考える理由のひとつは、わたしたちがふつう社会でものごとを進行させようと意図するより、ずっと非計画的でアナキーなやり方で働いているある種の社会組織を代表するからである。

(Becker 1970: 36-37. 下線は引用者による)

上記、ベッカーの「芸術と科学」が「ともに自在にどこにでも走っていけるようなやり方で組織されている」という発言の、「科学」という言葉には「社会科学」が含まれるだろう。彼は社会学界の状況を振りかえる諸論文を折に触れて書いている。たとえば、アメリカではフランスなどよりも社会学者や社会学を学ぶ学生の数も多く、いわばマーケットが大きいので、多様な試みが賛同者を集め、学会などで新たな分科会を組織することも容易だと述べる (Becker [1982] 2008: 377-378=2016: 408)。ベッカーが論じている芸術世界の「約定」は、社会学における多様な研究技法、たとえば大雑把にいう質的研究のエスノグラフィや会話分析、量的研究の多様な統計技法などに類比され、社会学の多様な研究技法や表現ルールと同様のものと暗黙のうちに示すべく、彼は「約定」を詳しく考察したのではないか。シカゴ学派、SI、構造機能主義、社会問題の構築主義、エスノメソドロジーなどのひとつひとつが、19世紀までのアカデミズム絵画、印象派、ダダ、シュールレアリズム、表現主義、抽象表現主義、ミニマリズムなどと展開する芸術流派と対応する歴史的表象として対比されうる。

ベッカー、ストラウス、ノーマン・デンジンなどの動向を彼らが率いた学派活動として簡単にまとめると、ベッカーは1961年から64年まで *Social Problems* 誌を編集して、レイベリング理論 (labeling theory) から社会問題の構築主義 (constructionism of social problems) が展開し、エスノグラフィがエスノメソドロジー (ethnomethodology) と習合して、会話分析をツールに取りこんだ質的社会調査が発展する土壌を支えた。これは社会学をアメリカの一般読者公衆に普及し、アピールする事業でもあった。1980年代から90年代には *Qualitative Sociology* 誌を、デンジンらのポストモダン・エスノグラフィ (postmodern ethnography) と拮抗するオーソドックスなエスノグラフィの拠点とした。ストラウスは精神科医療研究 (Strauss et al. [1964] 1981) において「交渉された秩序」パースペクティブを提案し、終末期医療の研究でグレイザーと創案したグラウンディド理論 (grounded theory) (Glaser & Strauss 1967=1996) を看護研究に導入して、社会学理論の橋頭堡を築いた。彼らもまたバージェスのような専門職立ちあげの情熱を持ち、社会学を新規な分野に適用し定着させていく思想学問運動の推進者だった。

バージェスのこうした専門職立ちあげ、養成にかかわる社会的実践が、ベッカーやストラウスら自身の学派の形成、指導活動の先駆として、彼らの芸術世界論、社会的世界論という社会的概念やイメージの発想源になっているのではないかと論者は考えた。さらに、シカゴ大学の世界初の社会学部で社会学者を養成し、アメリカ全土に新設されていく社会学の教員ポストに派遣した初期シカゴ学派社会学の立ちあげのプロジェクト自体も、ひとつの専門職としての社会学者のための教育プログラムを定め、メンバーのリクルート

と養成という実務を担当する同様な企てではなかったかと思われる。ベッカーやストラウスの着想は、そうした自分自身の学問の歩みを振りかえる自己言及的な視線の源泉ともなるだろう。

社会学を基盤に多様な専門職を立ちあげ、専門家養成の仕組みを確立しようとすることは、ストラウスの社会的世界論、ベッカーの芸術世界論で整理できる下位世界の分化過程に当たり、またそれぞれの専門職が分離していくと即座に学問的、社会的状況のなかで独自の変遷を辿りはじめることは、社会的世界に異質なアリーナが接合して分岐していく過程そのものと思われる。ベッカーやストラウスは、かれらの理論的イメージを確立するうえで、自分の指導教員であったバージェスの学問的軌跡を、自身の研究、社会活動の軌跡と二重写しにして、モデル化したのではないか。

イギリス国教会の内部派閥としてのメソディズムの教派史から信仰のアリーナ、労働組合史から炭鉱町での生活改善のアリーナ、イギリスにおける社会民主主義の発展史からフェビアンによる政策抽出・策定のアリーナという3つのアリーナは、現時点から振りかえって関係が深いとは思えない。しかしそれでも、メソディズム、労働組合運動、フェビアニズムをめぐる3つのアリーナの接続を構想できるように、同様なチャートがスモールたちの社会学部の立ちあげの運動、バージェスの専門職の立ちあげの運動、ベッカーやストラウスそれぞれの学問運動について作成できるはずである。スモール、バージェス、ベッカー、ストラウスらの活動は相互に独立していながら微妙に関連しあっているが、それはそうした運動の中核にいるかれらがシカゴ大学というひとつの制度体をはぐくみ、そこではぐくまれた知的達成を代表する人物だからだろう。

3. 初期社会学と初期シカゴ学派社会学の形成期——社会的世界論とアリーナ概念をもちいた記述

本節では、こうした専門職が依拠する中核知識の開発努力のうち、バージェスが師事したスモールらの世代において、他分野から参入した社会学者たちが、新たな学問分野としての社会学を大学制度のなかに確立し、有能な学生をリクルートして、各地の大学の社会学教師として赴任させていく思想的学問的運動に焦点を絞る。バージェス、ストラウス、ベッカー、デンジンらはそれぞれ独自の知的社会運動を率いたが、それらもスモールたちが最初に展開した社会学自体の制度化を反復再生産したものと考えられる。

こうした考察をさらにそれ以前の社会学史にも広げ、まず1830年ごろに社会学という言葉が発生する前後を扱う社会学前史の部分と、アメリカにおけるその制度化としての初期シカゴ学派社会学の展開に関し簡略版と、やや詳しいチャートをそれぞれ作成した。論者なりに着想の意外性を演出するためだったが、調査の進み具合を考えると、若干、不発かつ時期尚早の感を免れえない。また「社会学」という学問名称を受けわたす知的リレーの描写としたため、チャートの一つ一つの箱の連絡は、バージェスのイギリス史の場合とは異なり、人の往き来によるものではない。それぞれの土地で社会学という言葉をめぐる実践、着想が印刷物という物体で表明されることで、それを受容する研究者を通じ、場所、時間を異にするアリーナ同士が接合する¹⁵⁾。

まず社会学前史の簡略版(図1A)は、イギリスの市民社会論、フランスの人権、憲法

思想を母体として、サン＝シモン、コントの社会主義に発祥する *sociologie* という言葉が発明されるという発想をいたって常識的に視覚化している。

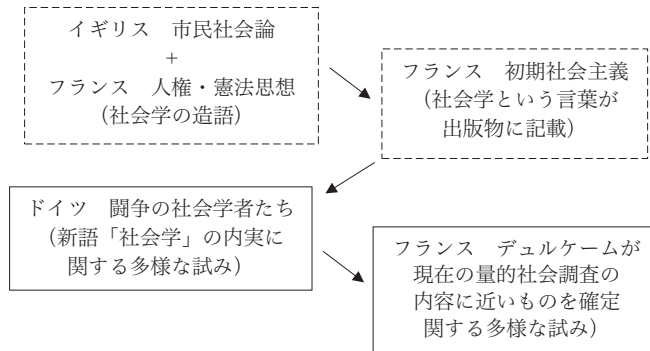


図1A 社会学前史簡略版

やや詳しいチャート（図1B. 鎌田 2015参照）には、世界史上初の市民社会論であるアダム・ファergusンの「市民社会史論」、また最初に *sociologie* という言葉を紙のうえに書きつけ残したことが明らかになったシエスが革命期の憲法草案、ナポレオン憲法の作成を通じて、人権規定を組みこんだ憲法を最高法規と定めた経緯を具体的に書きこんだ。ここから、為政者や国家の横暴から市民ひとりひとりを守る現在の市民社会の発想が、社会学という言葉のなかに当初から根を張り、組みこまれていることが理解できるだろう¹⁶⁾。

そしてのちに、バージェスを中心とする初期シカゴ学派において、制度化される社会調査という営みの原点には、コンドルセがいる（図1補A. 本稿 p. 88. 鎌田 2015a参照）。またサン＝シモンの着想が継承される過程で変形しながらも、フロリアン・ズナニエツキがポーランド語に翻訳した哲学者アンリ・ベルグソンの『創造的進化』を経由して遠いこだまのように影響を与え、ウィリアム・トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』（Thomas & Znaniecki [1918–20] 1974）の社会解体論のアイデアを、導いているという論者の「大胆な」仮説で事実の連鎖の片鱗でも捉えられているなら、初期社会主義と初期社会学には、通常の歴史的発生順序から予想されるよりも深い系譜関係があることになる（図1補B. 本稿 p. 89. 鎌田 2017参照）。すでにバージェス「社会化論」に関して言及したフェビアンたちの社会民主主義が、全世界各国の福祉国家化に与えた影響も考える必要があり、初期シカゴ学派もジェーン・アダムズのハル－ハウスも同様にこの社会的潮流をアメリカに定着させるうえで大きな役割を果たした¹⁷⁾。こうした諸概念の伝播に注目すると、図1の単純化された系統化の背後に、入りこんだ網の目のような系譜関係が読みとれ、こうした着想の蓄積自体が今日の社会学を支えていることが察知できる。

ごく普通に語られる初期シカゴ学派の歩みの整理に、シカゴ大学自体の前身がバプティストの牧師を養成する神学校だったことを加味して、バプティストというプロテスタント教派の基盤を強調して表現すると、簡略版のチャートに見るように、共有された教派的土壌に、ぽつんと植えられたウィリアム・トマスというユダヤ系ポーランド人のひとりの教

20世紀社会学と社会調査の発生史

市民社会論というルーツ

アイルランド啓蒙(18世紀中葉)
アダム・ファergusン『市民社会史論』(1767)
カルヴァン派(長老派)法学

人権思想・憲法思想というルーツ

カトリック法学(18世紀末, フランス革命〜第一帝政期)
シイエスによる *sociologie* という語の最古の用例
基本的人権(人権宣言)を組みこむ最高法規としての憲法の創出

初期社会主義という起源

19世紀前半
サン＝シモン, サン＝シモン派による多様な提案
19世紀版の百科全書・新キリスト教・
産業者の教理問答
1830年代にかれらは社会主義者と呼ばれはじめる

コント『実証哲学講義』
sociologie という語を最初にもちいた出版物の登場(1839)
実証主義, 人類教

ヨーロッパでの「社会学」の展開

19世紀中葉から末年
ドイツにおける「社会学」の展開
諸民族(人種)間の闘争を記述する闘争の社会学など
ウェーバー, ジンメルを含む

19世紀末年
フランスにてデュルケーム『社会学的方法の基準』『自殺論』など
現在の量的社会調査の黎明期を告げる著作出版

図1B 社会学前史やや詳細版

員により, 先行世代が今ひとつ明確に打ちだせなかった経験調査の枠組みや, アメリカ社会における移民コミュニティの形成という研究対象が提案されたことがわかる(図2A, B. 本稿 p. 90. 鎌田・中野 2003-2005などを参照)。つまり移民が集合して作りあげる社会であるアメリカで, 各移民の民族集団ごとに観察される社会過程や社会心理を観察するという基本路線がしかれる¹⁸⁾。トマスは50歳台半ばで大学を去らざるをえなくなるが, そのあとをパークとバージェスが教科書『科学としての社会学入門』や経験調査のマニフェストとしての『都市』において同心円理論や人間生態学という考え方を明確化することで, 1930年代半ばまでのアメリカや世界の社会学におけるシカゴ大学の覇権が形づくられる(Park & Burgess [1921] 1924, [1925] 1984=1972)。バージェスの尽力で量的社会調査, 質的社会調査という調査制度の両輪が形成されていくとともに, それは全米の大学に拡散

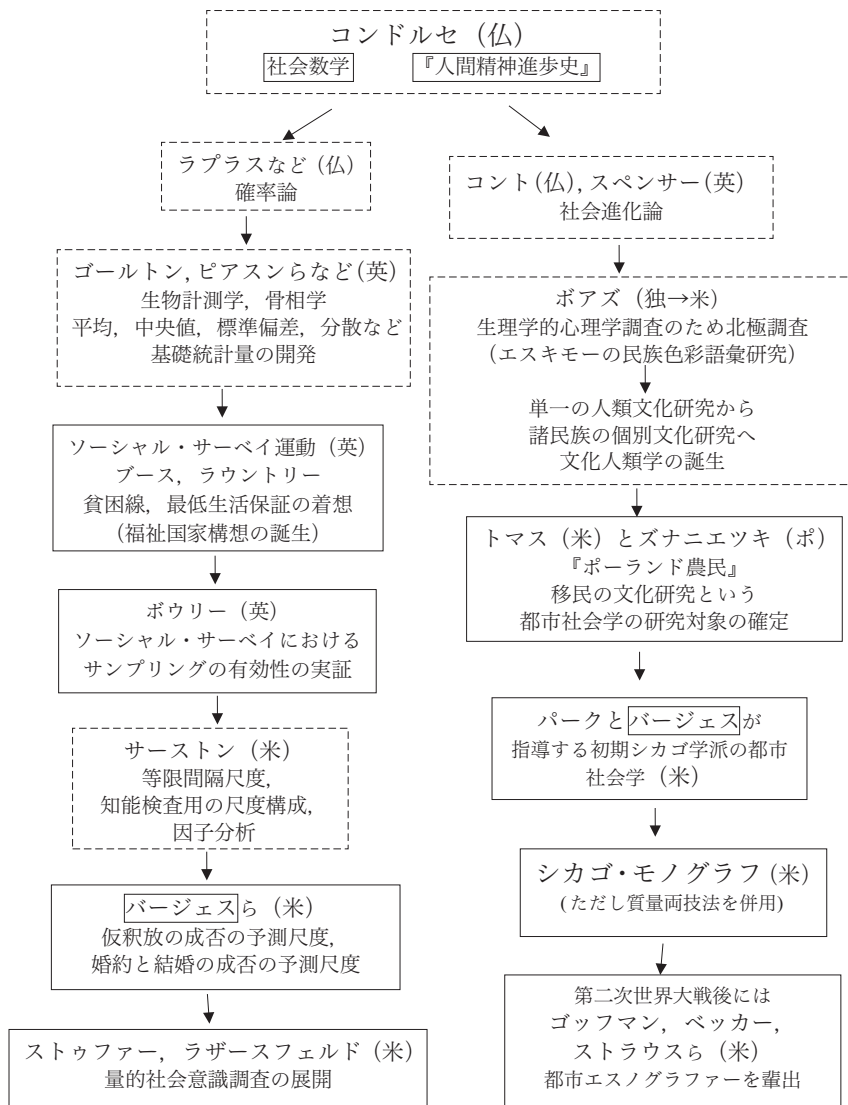


図1補A コンドルセを起源として分化する量的、質的社会調査技法の展開
(仏英独米を区別)

して20世紀社会学の総体に連接される。その過程で量的社会調査の方法論的基礎はラザースフェルドを中心に形づくられ、質的社会調査の方法論的基礎は、ブルーマーの理論的主張、またエスノグラフィと平行して著わされるベッカーやストラウスの理論的著作により明確化される¹⁹⁾。

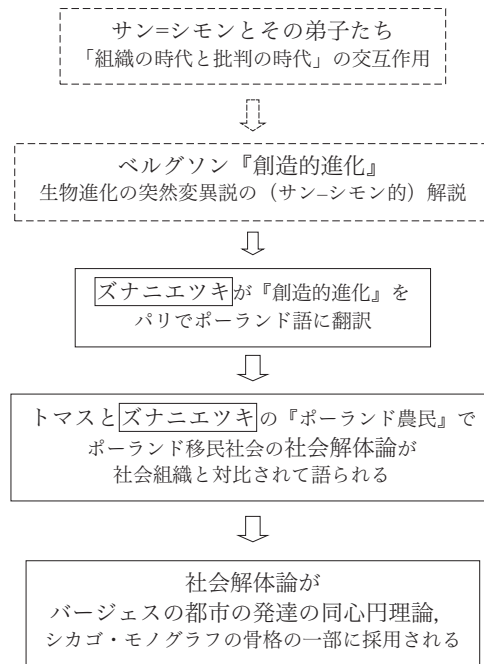


図1補B サン=シモン（派）から初期シカゴ学派への社会解体論の継承

4. 社会学と意外性

社会的世界、その下位世界、また互いにアリーナとして接合しあう異質な社会的世界の諸領域の分節化、正統化などの過程で、実質的に観察されるのはイデオロギーや活動を支える技術の開発に当たる人々やそれを採用し、互いに何らかの形で敵対しあうことを恐れず、社会的世界をめぐる新たな状況を切りひらいていこうとする人々、またかれらに追従する人々が織りなす「交渉」だと思われる。

論者は過去に、文化観光税、古都税が施行されていた時代の京都仏教会の観察をまとめる際と、精神科医療に関するフィールドワークをまとめる際の2つの機会に、ストラウスの交渉パースペクティブを活用した（鎌田 1991, 2002）。

その経験から、ストラウスの交渉パースペクティブ、交渉文脈などを現実の社会現象に適用し、その記述を蓄積して何らかの社会学理論をつむぎだす際の落とし穴についても若干の考えがある。たとえば、幾層にも積みかさなり重層的に社会現象に影響を及ぼしていく交渉文脈の分析を精緻化していくことは、突きつめていくと、日本で普及している看護学系のグラウンディド理論同様の煩瑣なマニュアル主義に陥ることが予測される。

日本で受容されたグラウンディド理論では、医師が加わる博士号審査の際に、質的研究をおこなう看護学研究者が無事に資格を得られるように、インタビュー・データは40人以上以上取ることなどと規格化した。理論形成においても、データの並べ替えや組み合わせによる比較から得られる直感的な洞察を規格化し、出来あがったのは、医学部に隣接する看護学部における学位取得に特化したマニュアルである（木下 1999など）。社会福祉系

バプティストの土壤に

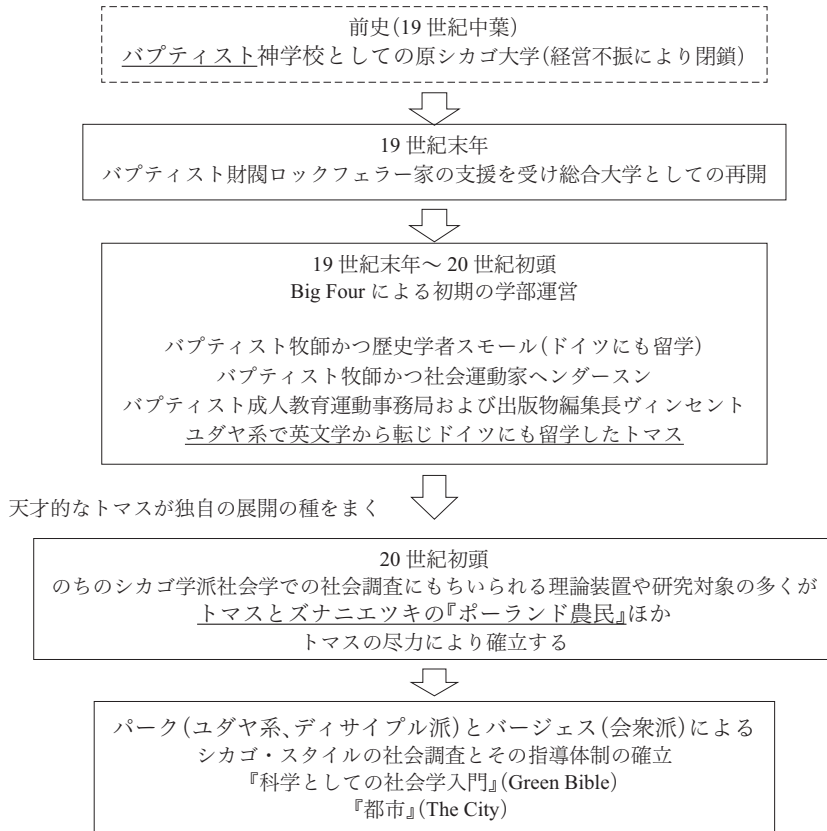


図2A シカゴ大学における世界初の社会学部の立ちあげ やや詳細版
(Who Was Who in America, 1942, V. I, 1897-1942, Marqui's Who's Whoなどを参照)

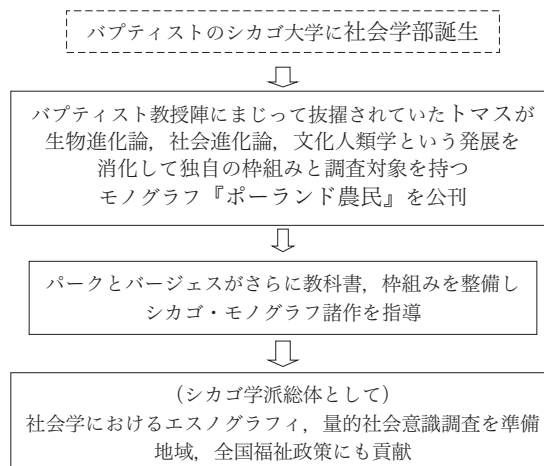


図2B シカゴ大学における世界初の社会学部の立ちあげ 簡略版

のソーシャル・ワーク部門でも、やはり医師たちの審査への参加を想定し同様な発想のマニュアルが輸入されている。

社会的世界論や交渉文脈概念などを社会学に再導入するに当たり、同じ轍を踏む必要はない。つまり、理論的、マニュアル的精緻化に向かうのではなく、社会現象の意外な展開を記述的に視覚化する受け皿としてそれらを活用したいと論者は考えている。そこで重視すべきなのがアリーナ概念であり、個々の社会的世界や下位世界において常に異質な局面同士が接合しあう場面に意識を集中することで、理屈だけでは考えられない意外な展開に意識を開く契機を用意できる。

常に社会的常識を再確認するのではなく、社会現象において非常識とも思える意外な展開をこそ議論の俎上にあげ、何らかの論述や理論化を試みる学問こそ、経済学や政治学が離陸したあと、フランス革命後の19世紀の社会的、政治的混乱期に新たに構想された「社会学」という呼称にふさわしいものではないだろうか。また論者を含め、社会学にかかわるものが、その起源にあった市民社会や憲法をめぐる思考を再確認し、19世紀に創始された学問的社会運動として社会学の在り方を、みずから振りかえること（reflexivity）もまた21世紀社会学の不可欠の一面ではないだろうか。

ま と め

論者はバージェス「社会化論」から独自のイギリス史の把握を読みとり、また「社会化」の定義自体が現在の専門職論に関連づけて解釈できるものと考えた。そこでバージェスの生涯をかけた多様な専門職の立ちあげ、養成の努力を想起し、後続世代のベッカーやストラウスが自分たちの学問的、知的社会運動を、バージェスのそれと同様に回顧しつつ、芸術世界論や社会的世界論などのSIの一般社会現象分析の枠組みをまとめ上げたのではないかと推理した。そしてバージェスらをはぐくんだ初期シカゴ社会学派を世界最初の社会学専門学部としてシカゴ大学に設置するという初代学部長スモールの試みもまた、バージェス、ストラウス、ベッカーらと同じ社会学者という専門職を立ちあげ、そのメンバーを養成するものとして、同様に考察できるのではないかと考えた。そこで論者が展開してきた社会学史研究のディテールを社会的世界論によりチャート化し、憲法制度に組みこまれた人権思想、初期社会主義に由来する多様な社会観、世界観、歴史観が錯綜した形で初期シカゴ学派に結集し、20世紀社会学、社会調査制度に継承されていることを通観した。

注

- 1) 本書は2016年に『アート・ワールド』という単数形で邦訳が出版された。ただし本稿では、論者が使いなれた「芸術世界論」という書名を使用する。*Art Worlds*という複数形も、諸世界の複数性自体に関する哲学的立場からも、そのままもちいるべきだろう（Gabriel 2013=2018）。ストラウスの社会的世界も *social worlds* という複数形で表記されることが多い。
- 2) 以下、本書のページ数はアラビア数字のみで表記。その構成は鎌田（2018: 145）参照。前稿に掲載した図表はインターネット上の機関レポジトリでも容易に参照できるので省略する。
- 3) 本節および次節は拙稿（鎌田 2016, 2016a, 2018, 2018a）の要約提示であり、すでにご覧いた

だいた読者には飛ばし読みいただいても差しさわりはないだろう。ただ、前稿から発展した新アイデアも僅かばかりは書きこんでいる。なお本稿では前稿で提示した参考文献、参照箇所は省略し、必要最小限のものだけを提示する。

- 4) クローリーやミードの生前には、まだ社会主義系の「社会化」概念が主流だったので、子どもの発達には「社会化」という呼び方で語られてはいない。
- 5) バージェス「社会化論」第1部は、論者自身がまだ分析的に考察していないので本稿では検討しない。ただ、バージェスの議論はスペンサーの「社会進化」概念を丸ごと採用して当てはめたものではない。
- 6) 1916年当時の *profession* という言葉は現在の専門職の語義とは完全には重ならず、クロウリーの議論でも、むしろ経済、法律に通じた専門家 (*experts*) が前面に出てくる。その用法はイギリスでも同じ (Perkin 1989)。現在、アメリカ社会学における専門職の代表は科学、産業、軍事の接点に存在する医師を中心とした医療専門職であり、多様に設置された福祉制度やその関連資格に依拠して地位を確立しつつある各種ソーシャル・ワーカーも、その一角に数えられる。20世紀初頭にかねらの立場は現在ほど強力でなく、バージェスもクロウリーも特に言及していない。
- 7) バージェスと「家族」(Burgess & Locke [1941] 1945) を共著するハービー・ロックの1930年の博士論文でも、北部バプティストは労働組合の労使対立的な政治行動には反対する傾向があるように論じられる。プリミティブ・メソディストの巡回説教師の労働組合運動への参加は、1937年にロバート・ウェアマスの著作で、当時の地方新聞や教派機関紙などから立証された。
- 8) カール・マルクスの「宗教は民衆のアヘン」という発想から見ると、宗教と社会主義系の組合活動の融合という現象は意外だが、実は広く観察されるものである。日本でも、有力宗教団体を母体とする政党では、日本の代表的社会主義、共産主義政党のひとつからオルグ担当者が移籍して、組織づくりを担当したという風説を論者は耳にしたことがある。
- 9) 後述するように、社会的世界論では、連接、分岐、交差するこうした異質な社会的領域同士をアリーナ (*arenas*) と呼び、重視している。ただし3つ目のフェビアンたちの政策形成の部分については、バージェスの参考文献や参照箇所を中心に、ウェッブ夫妻の著作やかねらに関する経済史の諸研究を検討した結果、論者自身が構成した。
- 10) このフロー・チャートは鎌田 (2018a: 20–21) を参照。
- 11) わが国で幕末の西郷隆盛、勝海舟、坂本竜馬のような人物の政治軍事活動が国民的注目を集めるのも、それぞれの個性が歴史の動きのなかでどのように相互作用し、新たな政治思想を生みだし国の政治体制を変えていったかが重要視されるからだろう。
- 12) 論者は修士論文作成の際、ベッカー著作で引用されるSIのエスノグラフィを読みすすんでいき、SIの技法、すなわち参与観察やインタビューと、出版された文献や未公開の草稿などをデータとして組み合わせて読解し、森羅万象を具体的に研究できる万能性、柔軟性に気づいて魅惑された。
- 13) ストラウス自身の文言に若干の編集を加えつつ、オリジナルな主張を整理すると以下のようになる。「オペラ、バレエ、野球、サーフィン、芸術、切手収集、登山、カントリー・ミュージック、同性愛、政治、医療、法、産業、数学、科学、カトリシズムなどに関する社会的世界が、空間、対象、技術また技巧、イデオロギー、他の社会的世界との交錯、メンバーのリクルートなどを通じ、もとのものから分かれて下位世界に分化、ほかの社会的世界と合流し、新たな社会的世界として勢力を拡大する」(鎌田 2014: 35; Strauss 1978: 121, 1982: 172, 1984: 124–125)。

SIは、社会体系 (*social system*)、社会構造のような固定化した社会イメージをもちいずに、社会過程の記述、分析を目指す研究手法であり、歴史的かつ、国単位の対立や交流などのマク

的な社会過程も分析しうる。たとえばミードは19世紀の思想史を、トマスとズナニエツキはポーランド移民のアメリカへの定着過程を分析した (Mead 1936=1994; Thomas & Znaniecki [1918-1920] 1974)。20世紀末の研究では、精神医療のレイベリング理論を展開したトマス・シェフが、夫婦喧嘩の会話分析と第一次世界大戦が開戦するまえの外交文書の分析を同じロジックで連結し、SIのミクロー・マクロ・リンクを明確に示した (Scheff 1994)。

社会体系や構造という発想は、どちらかというと完成された体系のスタティックな状態を記述、分析しようとするもので、歴史や社会のダイナミクスを把握する志向性の足かせとなる。そこでたとえば論者は、社会体系理論としての側面を排除した形で、ハバーマスの公共圏論の歴史理論、思想史としての側面に着目し、マイケル・ブラウォイの公共社会学的な発想の原点としてSI理論の系列に組み入れた。そして社会的世界論を巨視的な歴史現象に適用する際の視野を広げ、従来の思想史との接合を果たす橋渡し役として、公共圏論の変遷を整理し、そのうち、アメリカ独立戦争、英仏の革命をへて、ヨーロッパから全世界へ広がっていったように思われる公共圏を、「憲法に守られ市民社会をもたらす公共圏」、ハバーマス思想の展開において雑多なレベルで、多数、存在するものとして拡充された公共圏を、「社会的世界としての公共圏」と名づけ、こちらは従来のSI理論や社会問題の構築主義の展開において扱われてきたものと同様と考えた (鎌田 2014)。

- 14) 「領域」などとも訳せるが、ニュアンスが伝わらないので、原語カタカナ表記のままとする。
- 15) ただし出版物による媒介を考える際にも、その背後に異国の学問を学び本国に持ちかえる留学や、学説を海外、異国に紹介する宣伝、講演などの活動が伴うことは言うまでもない。
- 16) この図式は、「市民社会」概念の受けわたしについて、普通思想史、経済史で重視されるフリードリッヒ・ヘーゲルとマルクスによる展開を無視して、ファースンとシェスを淵源として直結させている (植村 2010 参照)。ヘーゲルの観念論的な社会観は20世紀社会学の社会体系論に直結し、マルクス主義は政治思想として20世紀の世界情勢に重要な役割を果たした。しかしそうした構造決定論や社会システム論の原型と考えられる要素を抜いても、やはり初期シカゴ学派に由来する社会調査の体制整備が、市民社会思想や憲法制度に起源を持つ公共社会学に属するものとあえて確認しておきたい。
- 17) ヨーロッパの社会学がアメリカに移入される際の媒介としては、少なくとも、古生物学者として生物学的体系性を宇宙論として導入し、社会学を展開したレスター・ウォード、社会進化論の形式で諸領域の歴史的变化を叙述しながら、フォークウェイズとモリーズという2段階の文化的約定をもちい、社会変動のメカニズムまで論じる理論装置を構築したウィリアム・サマーの2人について、スモール、パーク、バージェスらそれぞれと関係づけて語る必要があるが、本稿では省略する。
- 18) このチャートの眼目は、バプティストの教派的背景のある教師陣のなかで、一人だけ異質なトマスが異能を発揮し、従来の社会学とまったく異なる『ポーランド農民』を発表するという社会学説史上の偉業を印象づけることである。しかし、トマスや『ポーランド農民』の異質さは、それ以前の社会学が忘却のなかに消えていくにしたがい見えにくくなっており、従来の研究を補足して、別途、さらに語りつけなければ読者に伝わらない。その意味で、このチャートもまた、伝えられるべきトマスの革新性が社会学説史研究者のあいだで、十分に共有されていない状況において、意図未達の不発弾にとどまっている。
- 19) 量的、質的社会調査方法論発達史について、論者がこれまで知りえたことをチャート化すれば、別図を付けくわえられるが、それは今後の研究の進展とともに稿を改め、学説史のディテールを補足したうえで、発表することにした。

参考文献

- Becker, Howard S., [1963] 1973, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, New York: Free Press.
(=[1978] 2011, 村上直之訳, 『アウトサイダーズ』現代人文社.)
- 1970, “Dialogue with Howard S. Becker: An Interview Conducted by Julius Debro,” Howard S. Becker, 1986, *Doing Things Together: Selected Papers*, Chicago: Northwestern University Press: 25–46.
- [1982] 2008, *Art Worlds*, 25th Anniversary ed., Berkeley: California University Press. (=2016, 後藤将之訳, 『アート・ワールド』慶應義塾大学出版会.)
- Bevir, Mark, 2011, *The Making of British Socialism*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Burgess, Ernest W., 1916, *The Function of Socialization in Social Evolution*, Chicago: University of Chicago Press.
- Burgess, Ernest W. and Harvey J. Locke, [1945] 1953, *The Family: From Institution to Companionship*, 2nd ed., New York: American Books.
- Clarke, Adele E., 1998, *Disciplining Reproduction: Modernity, American Life Sciences, and “the Problems of Sex”*, Berkeley: University of California Press.
- Epstein, Steven, 1996, *Impure Science: AIDS, Activism, and the Politics of Knowledge*, Berkeley: University of California Press.
- Fine, Gary Alan, 1983, *Shared Fantasy: Role-Playing Games as Social Worlds*, Chicago: University of Chicago Press.
- 1987, *With the Boys: Little League Baseball and Preadolescent Culture*, Chicago: University of Chicago Press. (=2009, 住田正樹監訳 『リトルリーグの社会学——前青年期のサブカルチャー』九州大学出版会.)
- [1996] 2009, *Kitchens: The Culture of Restaurant Work*, Updated ed., Berkeley: University of California Press. (=2000, 藤澤美枝子・小池久恵・谷林眞理子訳, 『キッチン——レストランの文化誌』法政大学出版局.)
- 2001, *Gifted Tongues: High School Debate and Adolescent Culture*, Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- 2003, *Morel Tales: The Culture of Mushrooming*, Urbana: University of Illinois Press.
- 2004, *Everyday Genius: Self-Taught Art and the Culture of Authenticity*, Chicago: University of Chicago Press.
- 2007, *Authors of the Storm: Meteorologists and the Culture of Prediction*, Chicago: University of Chicago Press.
- 2015, *Players and Pawns: How Chess Builds Community and Culture*, Chicago: University of Chicago Press.
- Fujimura, Joan H., 1996, *Crafting Science: A Sociohistory of the Quest for the Genetics of Cancer*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Gabriel, Markus, 2013, *Warum es die Welt nicht gibt*, Berlin: Ullstein. (=2018, 清水一浩訳, 『なぜ世界は存在しないのか』講談社.)
- Glaser, Barney G. and Anselm L. Strauss, 1965, *Awareness of Dying*, New Brunswick: Aldine. (=1988, 木下康仁訳, 『「死のアウエアネス理論」と看護——死の認識と終末期ケア』医学書院.)
- , ——— 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, New Brunswick: Aldine de Gruyter. (=1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳, 『データ対話型理論の発見』新曜社.)
- 鎌田大資, 1989, 「H・S・ベッカーの「芸術世界」論——職業社会学からのアプローチ」京都

- 大学大学院文学研究科修士論文。
- 1991, 「古都税紛争における京都仏教会のリーダーシップと理論化——ストラウスの交渉文脈概念からの整理」, 田中滋編, 『古都税問題研究—政治と宗教のプロブレマティーク』(科研報告書), 33-55.
- 2002, 「理由なき反発——精神障害者患者会活動における感情的葛藤と状況の定義」(前編)『椋山女学園大学研究論集』33(社会科学篇): 189-210, (後編)『人間関係学研究』(椋山女学園大学人間関係学部改組・人間関係学科創設二周年記念号): 241-65.
- 2008, 「アメリカ社会学史における量的調査と質的調査——初期シカゴ学派およびアーネスト・W・バージェスの軌跡が照射するもの」『フォーラム現代社会学』(関西社会学会) 7: 113-124.
- 2014, 「市民社会をもたらす公共圏と社会的世界としての公共圏——社会学研究の礎石としてのハバーマスとシンボリック・インタラクショニズムの融合」『現代社会学部紀要』8(1): 19-45. (中京大学)
- 2015, 「市民社会, 人権, 公共圏の学としての社会学——英仏市民革命期における二つの思想潮流」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 46: 1-12.
- 2015a, 「コンドルセに由来する二つの遺産——量的, 質的社會調査の発生と展開」『人間関係学研究』13: 51-64. (椋山女学園大学)
- 2016, 「形成期のアーネスト・バージェスを解説する——序説」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 47: 1-15.
- 2016a, 「アーネスト・バージェスの博士論文における19世紀の社会主義理解——メソディズム、労働組合運動、フェビアニズム」『人間関係学研究』14: 49-66. (椋山女学園大学)
- 2017, 「社会解体論の原点を求めて——原初の社会主義者としてのサン・シモンから初期シカゴ学派が継承したもの」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 48: 175-88.
- 2018, 「アーネスト・バージェス博士論文における社会化研究——シンボリック・インタラクショニズムの祖型として社会的世界論を読みこむ」『椋山女学園大学研究論集』(社会科学篇) 48: 143-160.
- 2018a, 「メソディズムと労働組合運動の社会的世界論——アーネスト・バージェスの博士論文に学ぶ」『人間関係学研究』15: 11-25. (椋山女学園大学)
- 鎌田大資・中野正大, 2003-2005, 「初期シカゴ学派社会学の確立——E・W・バージェスの人と作品」『人文』51: 23-75, (その2) 52: 73-118, (その3) 53: 93-133. (京都工芸繊維大学工芸学部)
- 木下康仁, 1999, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生』弘文堂.
- Mead, George Herbert (ed., Merritt H. Moore), 1936, *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, Chicago: University of Chicago Press. (=1994, 魚津郁夫・小柳正弘訳, 『西洋近代思想史——十九世紀の思想のうごき』上・下, 講談社.)
- Park, Robert E. and Ernest W. Burgess, [1921] 1924, *Introduction to the Science of Sociology*, 2nd ed., Chicago: University of Chicago Press.
- , —— (eds.) [1925] 1984, *The City: Suggestions for Investigation of Human Behavior in the Urban Environment*, Chicago: University of Chicago Press. (=1972, 大道安次郎, 倉田和四生訳『都市——人間生態学とコミュニティ論』鹿島出版会.)
- Perkin, Harold, 1989, *The Rise of Professional Society: England since 1880*, London: Routledge.
- Sassatelli, Roberta, 2010, “A Serial Ethnographer: An Interview with Gary Alan Fine,” *Qualitative Sociology* 33: 79-96.
- Scheff, Thomas J., 1994, *Bloody Revenge: Emotions, Nationalism, and War*, Boulder: Westview Press.

- Strauss, Anselm L., 1978, "A Social World Perspective," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V. 1, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 119–128.
- 1978a, *Negotiations: Varieties, Contexts, Processes, and Social Order*, San Francisco: Jossey-Bass.
- 1982, "Social Worlds and Legitimation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V. 4, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 171–190.
- 1984, "Social Worlds and Their Segmentation Processes," Norman K. Denzin, ed., *Studies in Symbolic Interaction*, V. 5, Greenwich, Connecticut: JAI Press, 123–139.
- 1993, *Continual Permutations of Action*, NY: Aldine de Gruyter.
- Strauss, Anselm, Leonard Schatzman, Rue Bucher, Danuta Ehrlich and Melvin Sabshin, [1964] 1981, *Psychiatric Ideologies and Institutions*, New Brunswick, NJ: Transaction.
- Thomas, William Isaac and Florian Znaniecki, [1918–20] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, V. 1, 2, New York: Octagon Books.
- 植村邦彦, 2010, 『市民社会とは何か——基本概念の系譜』平凡社.